



選挙の後で ばあばの独り言

西笠巻新田 藤原春江 74歳

市長選だけなわのころ、千葉の娘より「元気でるか、小包ありがとう」の電話。その電話中、県道を走る選挙カーのウグイス嬢の声が入ったらしい。

「あら、にぎやかネ」
「今、市長選が始まっているの」
「そうなの。新潟県のこと、こつちでも話題になつてるの。田中さん、佐川急便、前知事さんの金権政治のこと。白根は？」
「そんなこと、ちつともない街よ。隣の町とは違うの」
「それは良いことだわ」と電話のやり取りをした。

5月1日号の原稿を募集します。皆さんが日ごろ考えていることや身近な出来事など、気軽に投稿してください。字数は400字から600字程度とします。あて先は、〒950-12 白根市大字白根1235 白根市役所 企画調整課 広報広聴係 ☎373-2111 ☎333) です。

原稿募集

選挙があるといういろいろな思いもする。これは候補者も有権者も同じ。しかし、人がど

う言っても、すっかりした理念で、「清く、正しく、明るく」のポスターのとおり、これから投票に足を運びたい。

ジャンボ釜と 庄瀬川又家

和泉 荒木 宏 70歳

昨年暮れ、白根市農協庄瀬支所前にジャンボ釜が目見えした。これは終戦間もないころ、当時川又家の当主であった庄瀬村長川又憲治氏が農業会に寄贈したもの。果樹防除の薬剤調合などに利用された後、米倉庫の防火水槽として使われていたとか。同支所では、このままではもったいないとサビを落として支所の入り口わきに展示した。川又家は一千二百年前に当地に移住されたといわれる。記録



によると明治二十年の米商必携蔵元数では「川又庄太郎五千俵」と記され、天保以降における越後自慢の番付には川又平エ門が西前頭十三枚目にランク。四千俵となつている。また昭和八年の郷内田畑調べでは、一千二百二十九反と、市内トップの農地所有者であった。

市民文芸

俳句

手弁立てこなく終へて日脚伸ぶ 成沢 素明
猫柳ひたぶる風に芽吹きをり 木村 トリ
薄水の水を離れて濁りけり 安沢 飛浪
みかんむき櫻切る如く話し出す 樋口 トシ
春風や依縫ひの日の待ち渡し 和泉 伸子
売店の桜餅はや売り切れし 山田 幸
退斤の五時のチャイムや日脚伸ぶ 荻原 里津
托鉢の鐘の音の澄む二月かな 小林 光子
救急車のサイレン近き余寒かな 古川 鏡
恋猫の血のまわりに薫の屑 (以上大風会)
日を追って洗ひ物干す春陽 知野信一郎
鯛釣の長靴干され春陽 間島喜代子
裏小路の暗さを占めて猫の恋 小林 なお
植木鉢落して走る恋の猫 真鳥つぎえ
戻返るひとりまさぐる鈴袋 遠藤 大蔵
露のとうさがし女工の昼休 田中美根子
土竜めて土が脈打つ藤のとう 名古屋蒼穹
郵便の来さうな予感春陽 丸山 虚秋
老翁の初音聞くや九十の朝 間島 秀穂
(以上かまつか新飯田俳句会)
玉木 長吉

戦争のテップ借り受け友を呼び 解説しつつか余念なき夫 小出よしの
煮こりをうすめ大根芋を炊く 小出よしの
香り漂う夕べのくりや 中村 京
白鳥は飄湖樓かしく二三廻り 長谷川久二
古里恋しや日本を後に 長谷川久二
二・二六うらみは深し同志等の 代々木ケ原の刑場の跡 小出熊四郎

白根のまちに もう少し文化を

浦梨 長井やよえ 44歳

山紫水明：北越雪譜に出てくるような所かと思いきや、この白根市も結構楽しめます。味方橋や富月橋から見渡す山々と中ノ口川は日に日に姿を変え、素晴らしい風景です。ここにももう少し文化が取り入れられれば、ひそかに思っている一市民です。例えば好きなドライブの途中、あちこちの美術館に足を止めます。文化に力が入った市町村は、何となくきちんとして落ち着いた活気が漂います。

名文紹介 何もかも丁度よい

七軒町 長谷川周二 64歳

私は長年表具の仕事をしていいますが、その中で忘れることのできない名文を紹介いたします。「何もかも丁度よい」

「お前は前丁度よい。顔も体も名前も姓も、お前にそれは丁度よい。貧も富も親も子も息子の嫁もその孫も、それはお前に丁度よい。幸も不幸も喜びも悲しみさえも丁度よい。歩いたお前の人生は悪くもなければよくもない。お前にとつては丁度よい。地獄へ行こうと極楽へ行こうと、行った所が丁度よい。うぬぼれる要もなく卑下する要もない。上もなければ下もない。

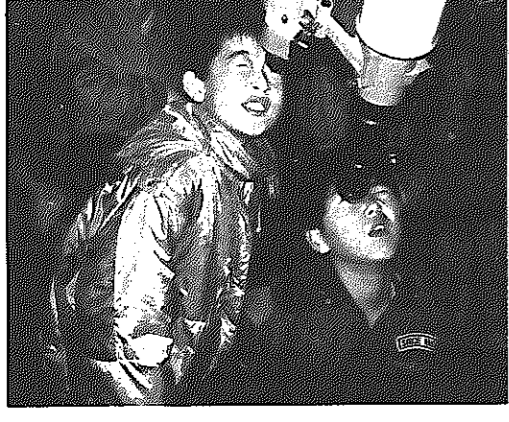
時の流れ 農業の変遷に思う

西笠巻新田 村松静枝 67歳

正月も終わり、家ではキュウリ、トマトの苗木を管理し、春の訪れを待っています。今は三人の孫の子守も終わり、農閑期に友達と昔話に花を咲かせています。孫の成長と作物の成長、この喜びは格別の味と、そつと胸をなで下ろす私です。

家は専業農家。息子夫婦が現代世相に負けないで農業に励む姿を見、何より幸せに思っています。今や転作と野菜の安値で農家にとっては厳しい時代を迎えています。私たち大正生まれには考えられません。「増産増産」という声、落ち穂拾いや牛を使つて田畑を耕した四十七年前。時の流れを感じます。今は新しい農業に協力し、澄んだ空気と大地を踏み締め、健康に注意し、落ち着ける農業を、親として願っています。

中央公民館の親子天体観察の続編として、三月六日、月の観察会が行われました。望遠鏡で見る月はクレイターがくつきり。子供たちは月の意外な素顔に、食い入るように望遠鏡をのぞいていました。



短歌

川柳

聞き流すことの出来ない苦勞性 田中 成子
捨て猫でさえも嫁さんつれて来た 後藤マサノ
横好きの詩が命と言う余生 佐藤トミノ
バーゲンに目を輝かすオバタリアン 佐藤ヨキ
週休二日一日バイトに出で稼ぐ 高橋祐四雄
信じてたバッチの裏を見ても 田村 恒夫
合格て叫び合つてる顔と顔 竹石 甚五
特捜が隠し金山掘り当てる 中村 尚治
肩すかし食わせライバル先に逝き 西条 ムラ
婚約の指を飾っているダイヤ 早川 英男
微くさい文句に堪える宮仕え 吉川 彰
三拍子そろつて嫁がまだ来ない 米野 光雄
桜満開そろそろ離婚状を書く 今井 七郎
六十路半ば輝き増してくる額 織田 福治
辛苦の友私の余白攻めてくる 織田 セツ
大正が酔うてロマンを語り出す 大井 長雄